

## 「商大の思い出」 学部14回 昭和39年卒業 森本 章

昭和35年、商大へ入学した。

当時、高槻から通学に2時間半程かかった。垂水から商大まで片道10円のバスに乗った。バスに乗り遅れると徒歩20分がかりで心臓破りの丘といわれた急な坂道を歩いた。

高丸の丘からは風光明媚な明石海峡、淡路島が見渡せ素晴らしい景観だった。

途中、三宮、舞子、明石など道草できる所もたくさんあった。

僕が入学した商経学部は一学年250人位だった。

学生、教員を含めて1200名程度の単科大学だった。

教室で「ひびの入ったハゲ」と前学長の日比野勇夫先生の落書きが目にとまった。

ひびの入った茶碗じゃあるまいし、余程きびしい先生だったのだろう。

クラブ活動も活発だった。

昔、サッカー部も一度は早稲田をやぶり日本一に輝いたこともあったと聞いた。

柔道、野球、ヨット、バトミントン、卓球、マンドリン、碁、将棋、写真など人数は少なかったがそれぞれに活発だった。また質実剛健をモットーに商大魂らしいものがあった。

1回生から簿記、会計の専門科目があった。

簿記の吉田寛先生のゼミに入った。軍隊上がりの若いきびしい先生だった。3回生になる前には関門があり成績が悪いと進級できない、とおどされた。夜、簿記学校へも通った。

外人の先生による英会話もあった。会計学の阪本安一先生、経済学の新野幸次郎先生、商法の村田治美先生、八木弘先生、経営学の後藤幸男先生、地理学のラッチェル先生、三木谷良一先生・・・と素晴らしい先生方に恵まれていた。

商大に真空管を使ったコンピューターが入った。小笠原稔という先生がおられた。後に兵庫県副知事になられたそうだ。

IBMの外書を英語で読まされたがさっぱり理解できなかった。居眠りばかりしていた。

又当時、安保闘争もあって学校も騒然としていた。

舞子の浜には商大の海浜学舎があってコンパをやって、酒を飲みながらわいわいがやがやと楽しかった。懐かしい商大小唄もここで覚えた。

商大くるなら神戸へおいで、神戸商大、日本一。良いとこ播磨の垂水町、よってけ、よってけ、ホイサッサ、何がどうじゃいどうじゃいな・・・と口ずさんだ。

商大祭でダンスパーティーをやって薬大や女子短大女子学生にパー券を売って儲けた時もあった。

又ファイヤーサイドミーティングも楽しかった。

商大の三回生になった時、中村萬次先生の会計ゼミを専攻した。

中村先生からの依頼で兵庫県の流通実態調査のアルバイトをした。

そのお蔭で当時のスーパーの経営者方々にお会いでき話をきくことができた。

東大の林周二さんの流通革命論がでまわり、ダイエーの中内さんがスーパースターだった。

僕は卒論に会計学のゼミにいながら、スーパーマーケット概論を書いた。

先生からはお叱りを受けるのは覚悟していたが、週刊紙の内容ではあかんで、と云われながら優をつけてもらった。

商大で過ごした四年間は楽しい思い出でいっぱいである。

良き先生や先輩にも恵まれ、いい友達もできた。

4年の終わり近くなって、アメリカの本場のスーパーを見たくなった。

ひとりで坂本安一学長室へ行って、英語授業の出席免除の直接談判に行った。

神戸商大の学生証をもってアメリカへ行って勉強したい。

3月には留年なしで卒業して就職先は永大産業にいきます、1年ほどアメリカに滞在いたします。

今から思うと自分勝手に虫のいい話だった。

数日して、1月からだと良いという教授会のOKがでて、特別の学生証を発行してもらった。

酒屋をしていた父にアメリカへいくのでお金の工面してほしい。また返すから何とかしてほしい、と頼んだ。

オハイオ州デイトンのNCRのスーパーマーケット研修会に参加し、そのままニューヨークの大学付属校に籍をおいた。

The poor man から the rich man まで、外国のいろいろな人々に出会った。

友達もできた。英語にも慣れ話せるようになった。この時が僕の人生で一番楽しい青春が詰まっている。

しばらくして学校で勉強するよりもアルバイトをして何でも見てやろうという気持ちに変わった。

糸の切れた凧のようにアメリカ、カナダやメキシコ中をひとりで飛び回った。

アメリカは広かった。

バスで行けども、いけども続く田園風景。

とうもろこし畑、一面の草原、馬や牛の群れ、こんもりとした森林や小麦畑。

誰一人、知りあいのいないところで言葉もよくつうじないところで、物珍しさのあまり何でも見てやろうとずいぶん怖い橋を渡った。

恐ろしいこともままあった。

異国の地で商大のいろいろな先輩にも親切にして頂いた。

ニューヨークでも三共生興の支店長 K さんや住友商事の支店長 Y さんにもお世話になり、ジェトロニューヨーク支店でアルバイトをさせてもらうことになった。

いつの間にか、僕の心は永大へ行って仕事をする事よりか、自分を生かせる商売がしたいと思った。

帰国して、父に、僕はサラリーマンには向かない。酒屋を継ぎたいと言った。

父はお前みたいな、かさの高い男は「もりもと酒店」には向いていない。

会社勤めをしてこい、義理が悪いと言って叱られた。

中村萬次、風呂先生から学校推薦を受けていい会社に入ったのに、もう少し我慢せよと  
きつくお叱り受けた。

あまり言いたくなかったが、アメリカでは一週間働いた weekly の給料が日本での一ヶ月  
の給料、21,000 円と同額だった。安すぎる、あほらしくなった。

僕が計算高かったのかも知れない

内緒で神戸湊川のスーパーで見習い店員として働くことになった。  
当時、父は商売で無理をして、あっちこっちで借金をし、行き詰りかけていた。  
60 坪の店を手放すといった。借金は自分で返すから何とか店だけは残してほしい、父を説  
得した。

僕は我がままで、勝手気ままな性格だった。サラリーマンになる自信がなかった。  
父の今までの信用のもとに「我唯一の力」で酒屋の商売をする道しかなかった。

僕は先生のアドバイスを振り切って、父の酒・食料品の店を継ぐことになった。  
2代目の社長を引き継いで54年目になる。

僕の決断が遅ければ今のもりもとはなかったかも知れない。

また商大は一期一会の場だった。

人生の勉強の場だった。

人と人との出会いは多かれ、少なかれ運命的であるとかいいます。  
その出会いが偶然であっても、必然であっても、その人に出会ったということは、そのひ  
との人生において、その人の人間形成において、何らかの意味、あるいは重要な意味をも  
つからであります。

良き友、良き先輩、よき先生に出会うのはその人の一生の幸せであると思います。  
僕は商大で良き先生、良き友達、良き先輩に出会えてよかった。

僕は今、喜寿を迎え、まだまだ第二の青春だと思っている。

僕は酒屋の道楽親爺で良かったと父に感謝している。

今までの自分を見つめ直し、これからの酒屋道楽の道をさぐりたい。

神戸商大卒論と就職先

森 本 章 大 阪

スーパーマーケットに関する一般的考察

永大産業株式会社(大阪)

